報仇

繪本四季物語

前篇

二

913.5
工
前編 2

報仇四季物語前編卷之二

東都　振鷺亭主人　著

第三齣

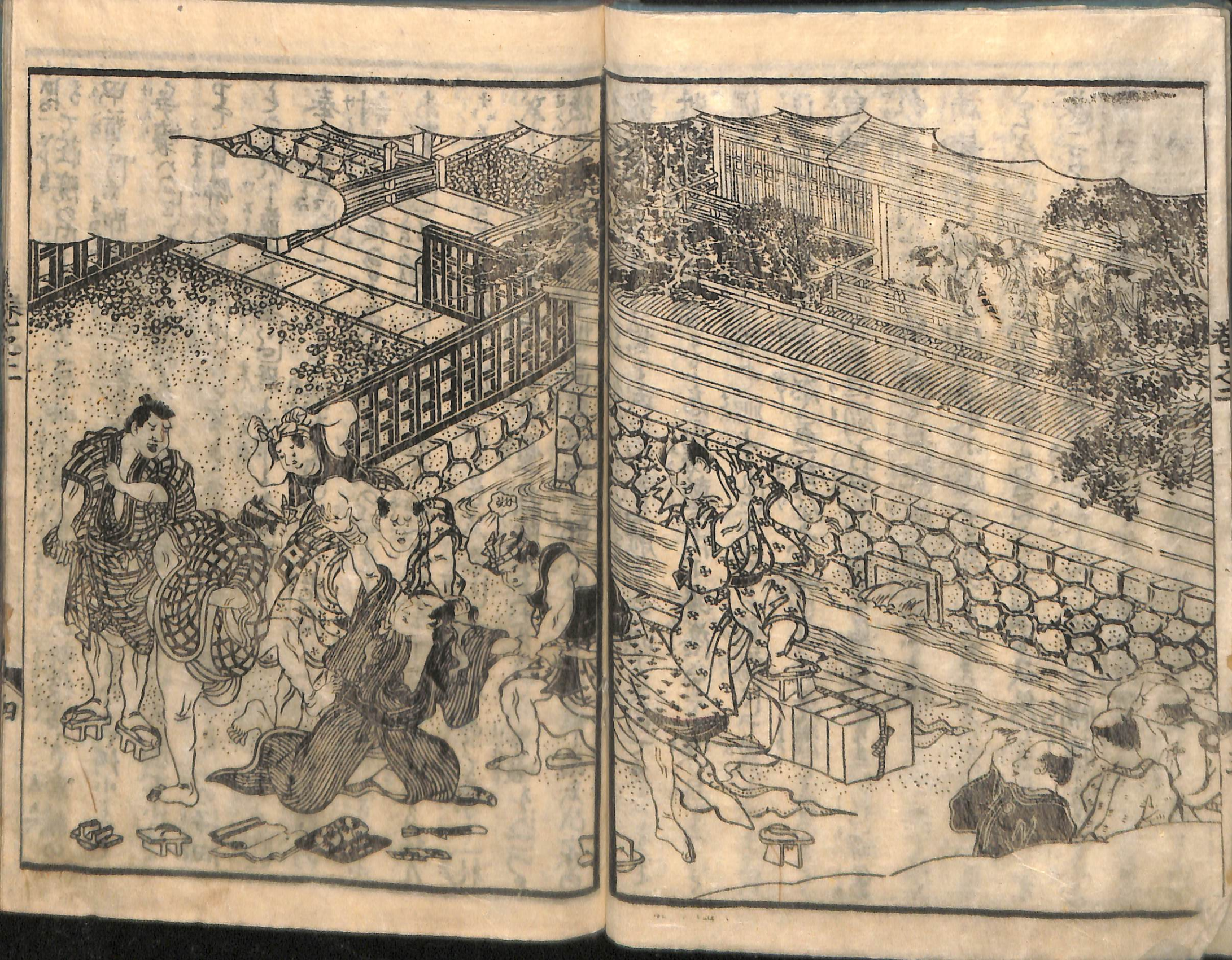
百源長者鞠氏誥くす子を誡む
濱瀬まゝ人席を賁て佳人を與ふ

偖翌日ゆいこう艶之佑ハ高麗四郎が計略ゑ任せ金澤の街ゑ出て首飾主店ゆいこう梯根るの代貨物荷ゑ代一旅関ゑ整て忽貨郎兒れ打扮ゆ容と変じ先茶坊ゑ立より金澤文庫と市ハいづくゑ至ゑ問ゑ立ハ茶博士答て云ふう金沢文庫ハ御所谷の緒と市てすゑち百源長者の府中ゆりゑづゑ路一二丁代ゆきゆくハ大ひなる石橋あり此橋をゑて灣の角ゆ建つ寺ハ名土蓋あり代蓋をなハち百源長者

諸々の書物并に器物の宝蔵ありて金澤文庫と申ハ是なりき
よりて又板橋を過て左に見ゆる黒門ハ男子乃学の入口なり右に見
ゆる赤門ハ女人の学文所の入口なり是を過て百縁長者の門前なる喚續娘
なりとおもひし人(乃至)ハ艶之佑これを見て足を謝て茶店を立て出て
を脊負て根捕と喚る二三丁の路とある所に果して大ひなる橋
あり橋をこえてその左乃方を見るに東に濱ある大路ありて左右ハ
縁をなせる松の並木なるを艶之佑此所を徘徊して前面を見れば即
瓦屋の大莊院ありてその周遭みな一連の土塀にて墻乃外にハ
一條の掃塹ありその両岸にハ都て皆松栢柳桃等の大樹ありて
其院の中にハ飛觀の高樓あり是に又一ツの板橋ありて是を見れバ
既に前門によする所に斬首の士七八個の後生脱晴にて角抵と
撲ねころびて高樓の内に大勢の女子ありて笑ひさゞめきて艶佑
只見るに高樓の簾を捲上て妓女の扇を揮て撲手を囃立て
此後生等が拍幹拍撲を見物して興をそへて有れば艶之佑
心の中に思ひけるハ彼踏にてこの内にはいりたらばやと顧踏しく
高樓の上を仰ぎ見てここに角觝の中に一個の大漢子ありて
背に花繍を施して稀なる逞しき撲者が體より扮ちや男まん
やがて小漢子を左右に投付て大路に整然と倒してその高樓の女扇連を
あきれて一齊に叫と声をあげ拍てさけ呼んで笑ひさゞめきける彼
大漢子ハ回目もふらず小耙と曰ひ傍の艶之佑が立たるを見て叱りて云
此奴ハ何の見物ぞや胡乱の奴かなといふやいなや只一打に脳門を
颯と打裂れ忽ち血迸るを見てすはや喧嘩と衆腕を引て男す

むかふ大漢子ハいよ〳〵氣を狂わせて罵て閙けるを一個の後生これを宥て
云やう你ぞ何事を角抵に負て些なき人にあたる事やある賈人ハ心よわき
ものなれバ爰を一人に噂して艶之佑が口に嘗させけるにこそ衆ぞ〳〵と
ありてやよ擲な打なと彼是ひしめく處へ欄住して脚をて蹴つまづき蹴翻し
また礑着て色を捕足を踏中に抱きて遂に艶之佑を塹の内に
撞落しける尚つゞきて客の上より二柱子を撮て礫にむら〳〵と抛つ。おのれや
艶之佑既に打殺されん所に件の高楼の内よりもおそき
との一聲爽に冥く聞ふが忽ち門内より一个の老漢大口袴を着たるが
急ぎ出来りて後生等に對して你等の集を挾みよ濱沖御前
の仰なるぞと叫びければ後生等忽ち畏りて云るハ我〳〵と家の息
蒙る者ともなれバまゝん人の嚴命背べきやうはあらず彼奴烏嘲宗

艶冶郎がことばを小罵りて武ハ鳥乱鳥賊といふて哄と笑ひて去ぬ去ぬあや
此時艶之佑ハ兜者どもが為に深く塹の内に陽落されて渾身ともに
泥水に濕ひ這々の躰にて爬上んとすれども塹深くして昇る事あたハ
ずしてたゞ〳〵声を揚て怒鳴る懲なまくと喚びける老漢ことゞえて
皂隷等よびて你等這厮を扶て引あげよと指揮すれバ皂隷等
軈て塹の内に下り艶之佑を扶起し漸く岸の上に揚げけるに艶之佑が
満身すべて爛泥に涂れ水に濡れたる風のごとくなりけれバ高楼の扉
のうちの老漢ありさまを見て大に笑ひ呵ひのどよめきあふの老漢もまた笑ひて云你臭気
甚しければ井の水にて洗で身を浄めよと艶之佑ハ慚愧に堪て急ぎ
傍なる井の邊に臨て井の水を汲て身を洗ふ再び老漢が前に来り
て拝伏を老漢がいふ束を正して我に陞つて来れと艶之佑と



ひかうて荘院の内ふ入よりさて此老漢ハ奥女崩の軍役信とて皇様
甲首ゆが即高く坐て懲之佑ふ向て云ハいかくの者なるや何ふよりの
爭嚷へなせ也懲之佑法ちんで云るハ下崩なる者く迷ごろ南平ふ
ゆて首帥の頼を絶いくと者ゆひがたのくごるふ彼者ともいの子
とるきハ不崩戎お擲いと疑ふ一命ふも及びひたんふ救治ふる実ふ
奉るふ言ゆとてもらくと涙をゆゆけるの老漢ふふ彼者ども八巷
討豊火の後るがさいとひふ南家の威光ふよりて速ふ退散ふる実
あやうゆ黄難かなとて即薬戎與へ衣服を干さとて一晌ふる祈
戎中ふなんて遂ふ荷子を斧屋て荘院を去出るさて此爭嚷を聞
後生とふ平塚高麗ゆ郎が部下の者ども也懲之佑戎氏家

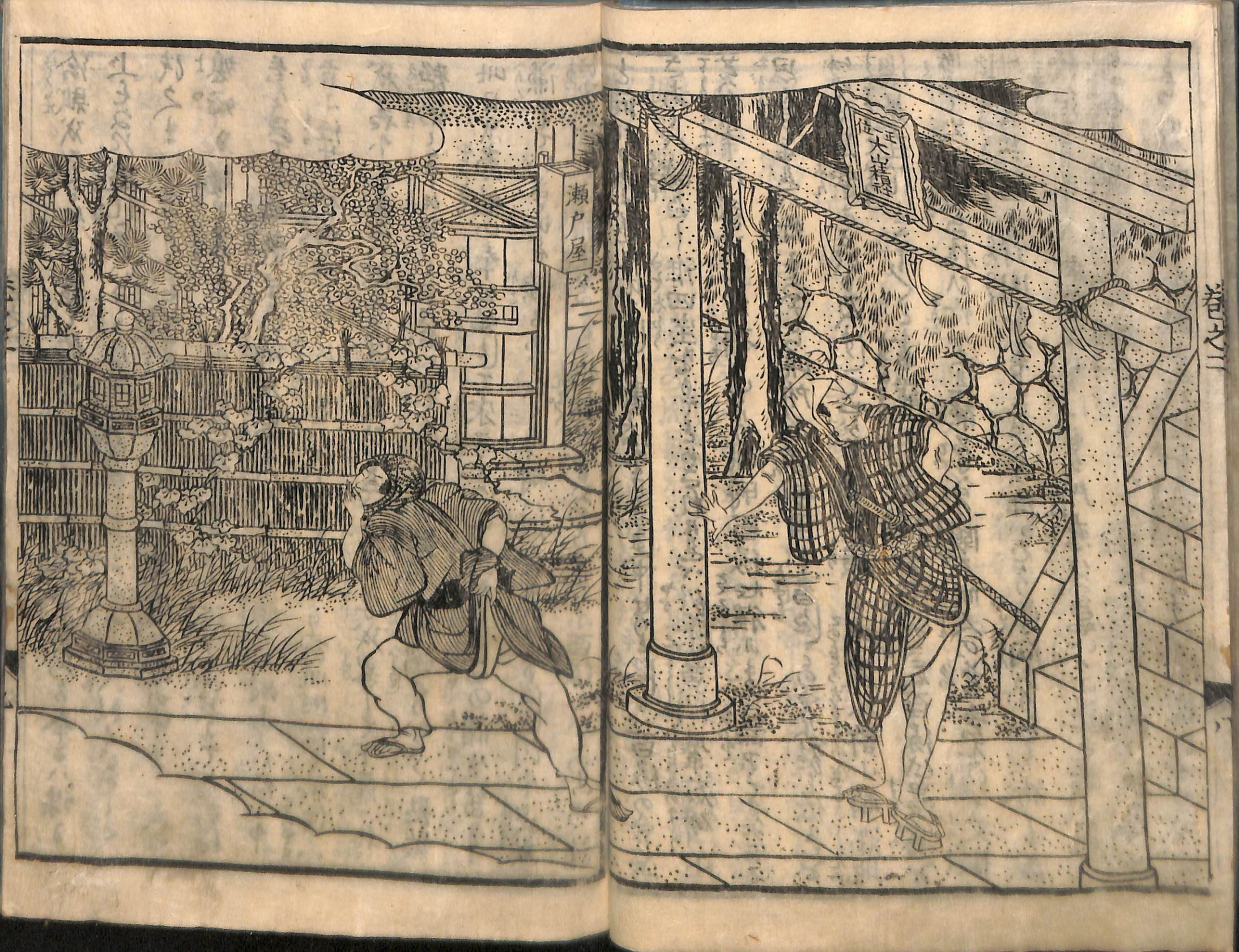
鎧へ立入ふ歩んが高名く通給て件の討ゆ聞ゆるなる此時懲之佑ふ
激戸掲れ酒樓ふ入ゆ乗るふ件乃爭嚷戎ふる後生名谷東
ふく坐を列ゆ高廉ゆ即八中央ふ座して大ひふ酒盃をのゆる
呵々と打笑て首尾いふくと問るふ即懲之佑十分乃首尾を偽
ふ後生名ふ対て今日八柔き由戎のべくゆゆ快く一献酌て給る
ゆとて御礼として圓金一塊づく分ゆ与ゆ後生名大きふ喜び各
民戎ゆとゆとてゆう戎く猿劇のとゆうに倣遂てすゆ踊んと慰ハた
つまども貫間ハいて面ざるや礫疵ハるゆとて急ふ為孫とる事斜ふ
ずふふハさてゆき艶之佑ハ亜ふ酒一石二斗ふ鮮魚五ハ隻物臺ふ擡
させ懲新ふ雇まふ持せ再び荘院乃内ふいりてゆ軍役者ゆ訪ひ
登へ一孔の寸志なりとて件の黒戎進ゆるゆ軍役者ゆ物と

急よりの根ゑ乃雕鐫精細ふ妙を盡て莊院ふ持まゐらの執徒
皮ふつひて奥の首尾を何ひるゞよりひとゝよ若の執成ふよる所
ゑりとて側のごく街ふ人を絶て高く河畔を求る下宮給ふ勸め酒洗ふ
救遍巡りる処ふ懸之佑執役皮ふむうひて問てふ某今日ふ
まで佳被ふ出入仕るとゝどもいまだ相公を詳しそまつりるゑ
頼くハよきおもゆわゝバ詳敷を遂さ給ゝや執役皮とゝを空て去
さあゝハ者のゆゑり扣公ハ只今庭心ふて小黄門と柔徒とあそび
孤ゝ高ふゑり見下直ふ庭心よりきて信ふ詳しゆ申されよとて所る進
ちゝふるゝど懸之佑執役信ふ注ひ庭門ふ来ていて柔徒を何ひ
足ゝバ四隅ふ松竹搖相成徒言ひ本場ふ内ふ主人百緣とゝて其
相線最正くして龍の眉風乃目晃梁すゞゝて高く年の汰い六十余

とゝ見ゝく身ふ薄花田浮線綾兼の袍を穿奴袴乃柔徒を緩
見ふ花風靴を穿たまひひ又人乃扈従さち比く気徒を踢て出ハ
懸之佑ハ身を躬め両ゑ手ふつひて柔徒の眷勅成ゑゞ見ゆ乃ゞ
懸之佑が頼を成徒とゞき時集りるゆあゑたまなゝと孤廻る柔徒
百緣接筒不著機金をうて踢ゝ直バ徒ハそるゑ宮ふ昇て鞠怪
を絨く直ちふ懸之佑が身を滑ふ滑到を者ふ懸之佑元来上ゑゑ
バ一対の膳量を匹駕醤揚とゝゑ那滑し柔徒を百緣踢
けを百緣とゝ成ゑて大ふ喜び給ひ係ハとゝ二石の者をと問たまハ
地上ふ詳伏して中乃ハ小鶏ハ御飯ふ出入仕る化貝部児まて伝
胡乱ふ一通の乳徒を見ゝ候のゝまて只今偽の者仕り垂乳白
ゑてまつりゆと割ふ頼を低ふりる百緣のゝゑふ係が只今のゑ松た

一流なりいざや此場まで年生の師法を使ひ見せよと宣たり懿之佑
三辭退し申さんとぞ辭容きて爲すず懿之佑止るを得ざるて行
け中よりて百緣乃相伴よりまつる此附懿之佑心よりおひるはさて
まて年生の本事成出すき處なりと精神成料撥てかそれ〳〵一箇の
氣穏後横上下左右前後ちくぐ法度小合ひ心と思儒膠とりく
懿之佑よ居在るがごくなるべ百緣大よ嘆賞し給ひ懿之佑をかぐえ
く你ハ凡下の儀表小あず爲て書を儀むやいるやと問ふよ懿之佑
僕不鵬ものひ〳〵ども種書ハいるるる記得中ぬと答しるべ百緣又問ふ小ハ
何の經よりて学びや懿之佑答ふ尚書ハ習とれども其実ハ五經
倶よ通ぜりと臣が学士の周易を言ふを曉沼ふ臣ふ易經ハ知
隱ちくれとやろ百緣と是を聞て殊よ喜びたまひ你を称ハいふ

と問たのふよ懿之佑まをく書法を見きまへ中ぬりと臣ハ百緣のことよ
さあるべ試ゑし進四室をのとめされ是ハ紙て小黄門紫石硯小
黄毛筆竹氏の成をて持まつり此時百緣心程小まず詰てるやと
思食まをハ你をのたち此所小便亜用と書臣このとり懿之佑を
字く思索をるも及ずしてやゞて筆成援しぶ此處不許小解滿地
愿是在花とさらくと書罷て是成捧ぶて跪きは百緣氏墨瀋を
除て大小弱き持ひ你ハ是能ものの頗る明人の年言を知て文徴
明董其昌が骨肉を書と爲へり你かたり学問あるゞ祇しき
種紀をせんとりハ我家よ奉仕とり所存ハるきやいふ懿之佑が云ふ
る命小遵ひ赤心成抽ゞ仕そまつれん百緣大よ喜び給ひ我庫乃
うち寫帖小事を缺るハ你を宋子とるすべきが你いうたかうの


瀬戸屋
正位
大山積神
巻之二

給賦式を知るや艶〻佑が僕高家の取番ふあづる奉るハ体ふ
上をゑた造化のいさゝ身乃價式中ところふあぶにくくゐぐく
佐くまい〻せてり〻と芸魚よかゐひはバを節侍女衆の中ふて一人の
想婦式楊を妻とゐとゐを四色猫るふおねてハ僕が滿足ふて百緣
芝左安て お領詐〻まひ婦式要るハ人言りゆく恒ゐの附あ〻バ你が中
旨ふ任せて祀合色さて你が名ハ何と中ゞと問さゐた此附艶〻佑中ふ
式名ハ「ざゐみハ似寄な」と思ひ是バ之の一字式畧して下龍が名ハ
艶佑と中ひゐりとゞ答ね是よりてミゐ艶佑と喚慣りかくく艶佑
此日式尚敏の奉公始して宋子とゐり色が「顧書房の諸生結ゐ
謙ゆていさゝかを誇る事ゆくある附ハ酒食式買てゐて四川手文式
家くゐせ色バ諸生結ミゐ信彼せざゐゐるるふ百緣ふハこのゞろ諸

ゐ学乃学問緣ふ進む式ゐそ大ふ不審ふおとされ色石にその中ふ
連歌ふ数て花月の吟式倣る詩ふ句句中有花有月如長空影
動花迎月深院人帰月伴花雲破月窺花好處夜深花睡月
明中とうの句百緣大ふ驚きたまひと是孺ふの及とまろれあゞ色抄寫
とるふあ〻ずバ必ず是人乃作ゐ色とて諸ゐ巣を諸問ふて遂ふかくと所
なくく是艶佑が自作ふてこのゞろミゐ渠が改竄を加ゐる色「明白色」ハ
百緣いよく驚きくまひ面のあさゐ題式色て試るふ艶佑が詩ハ宋の巨匠
ゐ風ありとて去きゆにその才式感色「寵光日くふ詠ぬ法處ふ庠のゐゐ
みゆゐりまれだ百緣艶佑色てたゞくくその事式模たむるふよゐ所の行ハ
毫怨を私なくまゝ他ゐく給仕のく貴人を春尽と美至る有日艶佑
熱おかひるハ秋原来尚敏ふ身を屈ゐる事ハ踏ゐ式元沒べきゐる

だのりるるは家法厳しくて男子殿により曹房の内へ入るかなひがたれハ今日ハ明日まで延引が而武士なる事ハ四ツ時くらむ程ちく月日を重ぬるとのうたてさよとて帳とて嬉ず況とも霖雨のつれ〳〵なる徒ハ房ハあるて琵琶を操持して平家をぞめくる昔附近衛院の朝ハ頼政鵺を射て恩賞とて茨壺の菖蒲乃前を宿の法師ハ鶴丸とて故事武今我身のうへ比へ況心ハ免て弾うけるる此時百緩ハ祖乃上ハ堅服足小侍足汝身持て若ハ色ハ演淑夫人ハ むかふ のうちの ふうあ是陶ハ色いま能佑が琵琶の一曲心ハ感ぞるところありて事ハとく弥ると見さの這願その比ハ時節を以書ありめを許しさびて事武能〳〵小某垂吳俊領嘗ハ色ハ壮年縁を して妻を恋ふるとは之ハ這願いま我府中ハもはく得力ハ人ハ偽仰ハ

あ事ハ諸ハ人乃侍女を與へ妻とハ這願ハ脚を繋ハ免書房の主箸とハ是やと思ふとあり是ハ夫人を喜び抱ひて吾徐ハさとを ぞ ひへ這願ハ小心馴謹る事ハ無く若の親ハとハ称なを猶れども年壮して立箸ハ の ぞ ん事縁ハ重ハ況ハ侍女の中武配せ ふ ふ おねてハ家の親能ハ是ハ夫ハ両侍ハ ハ ん さ ハ なぶ ハ 緩乃事ハ是ハ自ハ撰むハ海ハ是ハ宜しハ ん と を 被中是ハ百緩此程ハ許容あり急ぎ猶後を可被抱結ハ ぞ 空ハ

第四齣

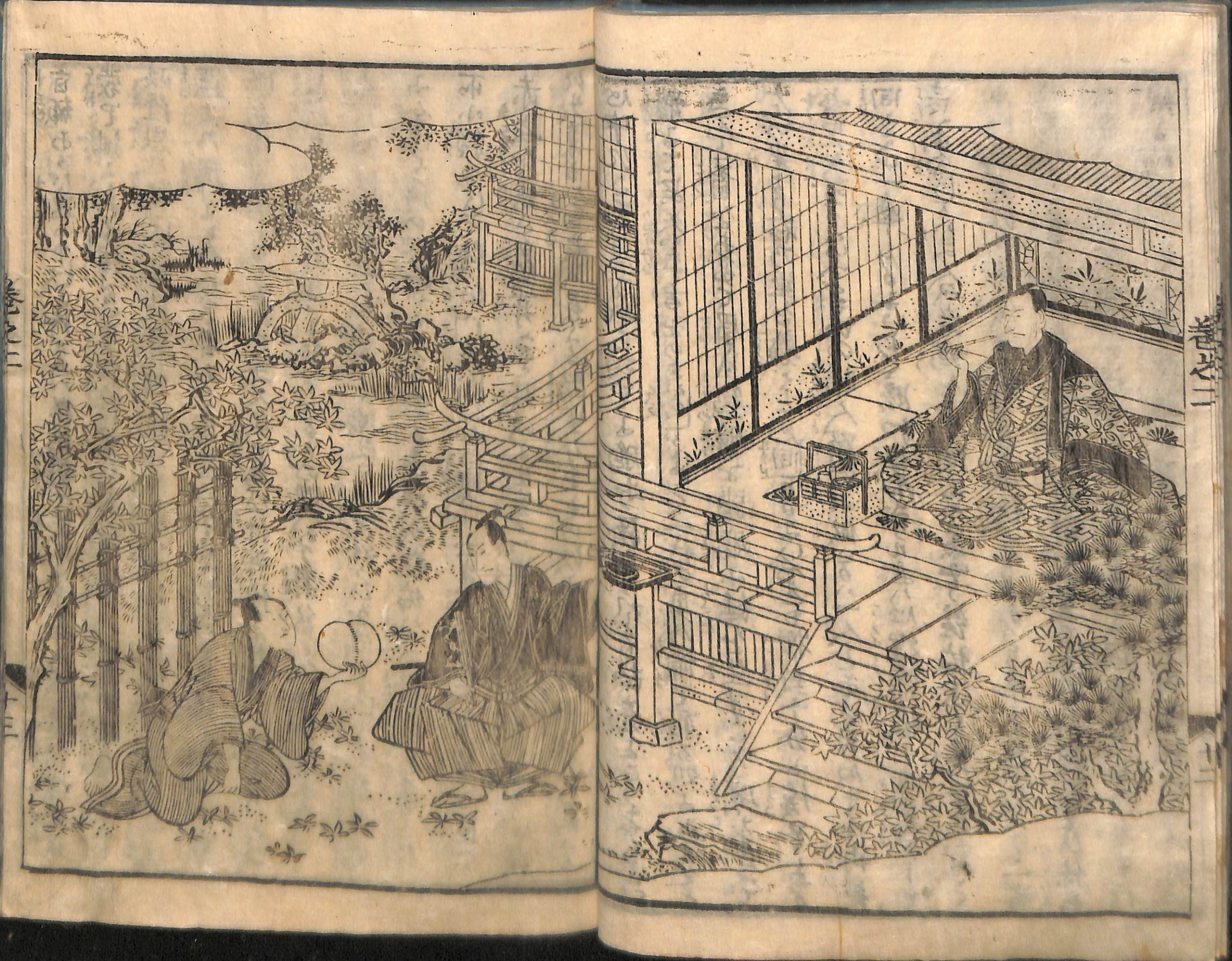
艶之佑　金澤文洋乃印武墓ハ

男女川帥所谷の小史を開を

尚寝演淑夫人抑班老鴉を ハ 可被仰付旨ありとて能佑ハ 能佑ハ何事ハ ハ ハ ハ ハ 急ぎ書院ハ 是ハ床さて見渡せハ正面了

菊縟戎搆へて一位の演漱夫人地白の衲襠を匿てうぐさく匿指ひ
待女三十餘人左右ふ二行ふ座挑刻う若その裝を飾り美戎
盞ふ捨れて恰一班の仙女王母碧娘を凡族擁く瑤池のとふ在が
どく四方ふ許長の燈燭と輝煌事の體美をまくしておもも国皆
まくそんくよりう雅伝戎事情をえて嚇得して心沈突そうくつれども
心の中大擬倩して行のとなく独接合て何若うその附抑班老鴉ま
人乃命を受く雅伝まむひて中るハ雅伝平生小心ふ事を勤る
の条乃満足ふ思ひさ迄今牧を蓋ふ命じ云ふるべきふ為ふ書るしてハ
事時きるも似う依て一人の侍女と国の伽に揚んとの乃事ありされども
緣の事ハふの思ひるもふる邪ふ今此侍女衆の中ふおねて一人発す
邪ひものせこぐう響ゆべとの乃言ありとぞ陽ふる雅伝芭を安て

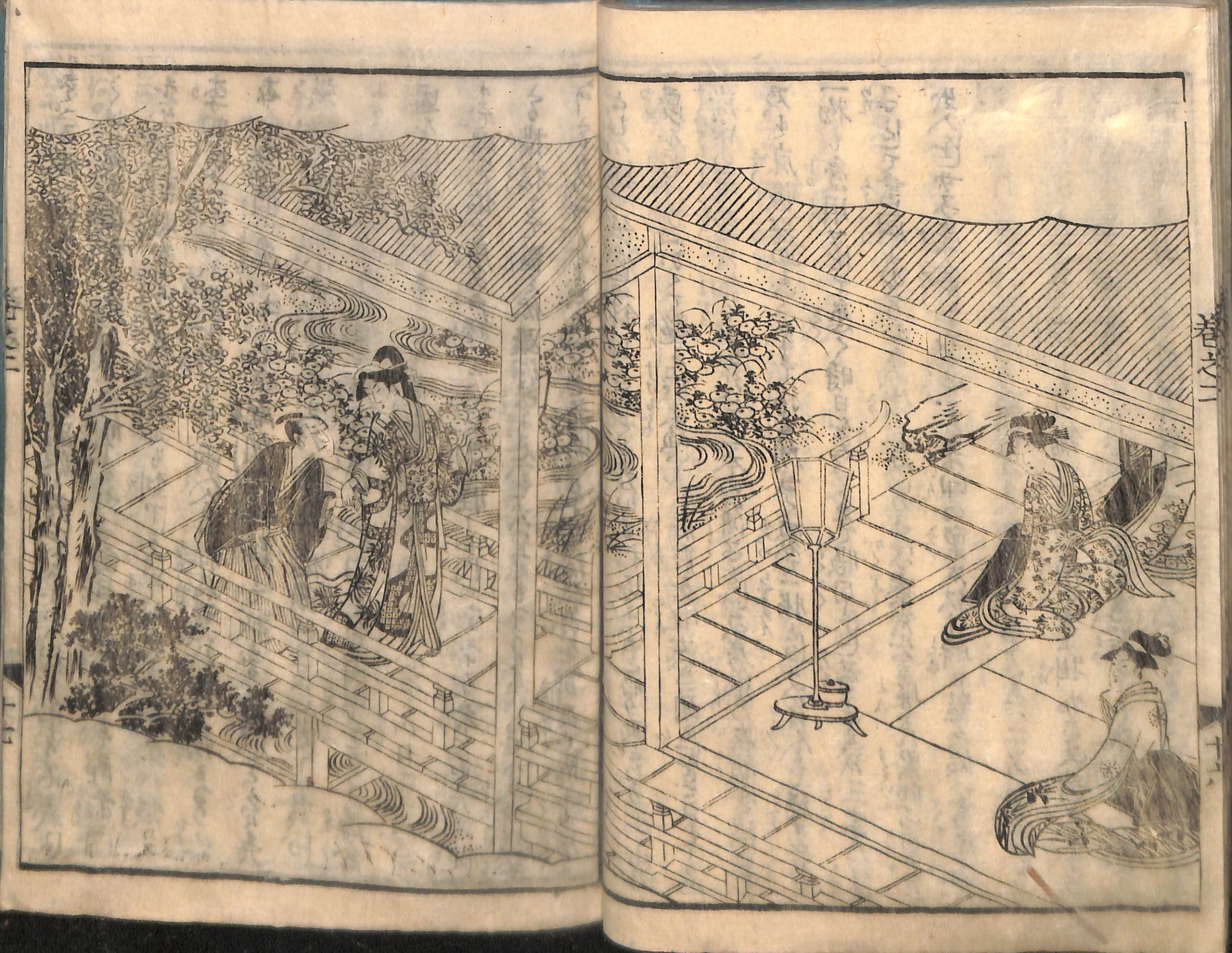
心中ひさてハ謀成ぬと頻ふ胸打騒ぎれども故ふ表ふとうあるさ
体ふて呂天ひき者をのを給ひ匿ぐはしく一代の身乃備ア恥る処ふあくと
きふと首をあおて眉戎鍬瞼を張腮ふ延を生すごう晴を定て
尤の星ふう右乃坐を熟くと見回るよいぐまも標致十分ふ優アるある
女児ふ当るうとうどるかの情人路江ふ似う言ハ一人ともうごう似まくと再見
同をうる一遍ーけるよいよく路江ハ居ごうるまバ心程朧朧し曖昧として
言を失ごうふまん人又老嬶をして同ちあ言ふ雅伝ふく書を見完たく
中ぐいぐまにも美俊ふく揚んとの作うとあうるまとぞ雅伝ハさ一言
の答なく首を低てどぬう生人武躰を覚てとに不興たまひ係ふ
ひきハ今此三十余人の侍女の中ふ係ぐ言ふ似う者ふ兎角ア
他ふ劣せー者あって進退を変せる年ふ且ふ端を出ふ此外の



旨綸あらば速やかに上京せんと作り立て能依謹て主人に申奉る僕主君の媒妁式
蒙を結ぶ事を揮べき事を許たまてる可実に生涯の面目終身忘る
此隆恩乃報ゆる能ず徒に栄耀を思ひ中条ひとり主人随身の侍女迷
還さ乃席を去ハざる者あらをつさバ式ゑ兎の蒙ら狐る不ゆく親
世免ぬ給ふんやと申されだま人笑せ給ひ作吾儀ゆ者畜れ去ありとの
疑ひそいらひを此席を除まざるの旧人あり集給ふ源き是あり
為ハ辞世かゞ此ゆ人ハ斎しく嘲ひて作ゆ祝ひを満さとして耶光姫
宛然とゞ国ゆ臣ゆハ能依当ひ人を見せるゆ井たあくを路江が昔日平姿
此趣成暁ゆて推ゆ国ゆ中臣おゝと易ゆる能依流石おかゝ義
云がゝく路江を指ゆゆの老婆ゆ告て出るハあ臣ゆあ臣する能色の衣裳
を思ゝる婦人いまゞ定る法まもなきゝと申けるハ主人喜を敬そと
のゝ事ゆ作心あゝハ宮の妻ゆ楊ゆ臣が但路江いふぞやとそその面を
回顧て微そとて嘆ゝ世給ふゆ路江ハ満面ゆ通江して時の面目ゆ
鏡ゆてゞ見ハゆ主人のゝ事ゆ彼宮蒲前に申ゆ祝とを路江能
依ゆ書ゆて能ゝ能依ゆ此源三位の使ゆ明日完上乃吉日
ゆ見ハ五に鏡ゆを持て壽能依ゆ作ゆ西人ゆ遠ゆ遠て

きふの後明日ひともよ小田原よりおをむけくの月と若よ家を法を
惜老の盟ゑを圖らんと思ふ個の月よく某に注ひて氏紙を為び
出んやいふ路ぶがこさてとこ五月月ハ高砂の月方なり若子金乃
軀氏いやくの君よ尊ら氏春ゑさいふ氏て芝命よ後ハ芝ゑ
たらんや若と相むうて聘お親と若と雙栖て一身を芸ゑせんかまく
うもゑくひともで妾ゑ法さゑき氏聘るとまの形ゑもとそ只顧喜ぐ
中ゑまとハ勢之佑も大ひよ脱で云ゑう乃月流俗中よおゑく名士を
識ゑるハ保ゑ汎排徐綺の流なり奇偶ゑ新哉乃兎ゑ花号ハ色
某蝶我花号ハ五環某ゑう故とも平城後後の術時重陽
乃黄菊の宴を世ゑ世なのふよう某を術後ゑ摽ゑ彩らゑ
ゑ氏を世ゑ世ゑ夜で主事の世ゑとて顛倒風

とむらはく紙窗の斜月きらくと差ける程逐ゑ雲と成り雨となり巫山乃
夢をむすびぬかくて艶之佑ま姦いよく莊院を脱出き用きをぞゑもとふ
府中の寺要氏細々ふかゑとて一本の簿ゑとゑ又房中乃衣服金銀等ゑ
及ゑ床帳器皿ゑいるまで法る所ゑく裏て一性とゑ又名人ゑ稽ゑ氏と
一物も受用せゑて悉く時日をきて色て帳国とゑ芸ゑ五氏三家乃簿
ゑとて書厨ゑ加ぞうおきぬ備をゑ男ゑ学案氏出る眼ゑ黒印の票を氏
出入ゑ女ゑ学寮を出る眼ゑ朱印の票氏仕す時ゑ艶之佑ハ書房中の
主後ゑれ黒印をあぞう路氏ゑ朱印をとぞゑ五ハ二ツの印重をと
もに後門ゑおきて鎖しその鑰匙を部後の上ゑ掛おきゑ詩文章ゑ
乃徐ゑハ悉く焼棄ゑゑ此處を立去る書置とて壁間ゑ一首乃
詩を題ゑうまくゑ府中の男女ゑ陪人おゑ五ハ門の出入をゆる



きざる従者ありしかバ艶之佑出るを路次に待うけて云ふにハ我くれよりの不義は
く咲処が投奔するにあらざれバ明らかにならず白日に退く出んとて那家門
を出べき計較をめぐらし其翌日にも到りしかバ早暁に家を艶之佑ハ張三
李四といふ二个の小吏を呼出し両人今日称名寺へ代参に詣るなり係り
高人あらく彼の処におもむき廟所を掃除して我が来るを待居よと云ひしかバ
張三李四二人の小吏畏りてぞ出行かの艶之佑路次にさてハ心易しと喜び也
おくれぬ二人の小吏が後に跟随つゝ家門を出て府中をさして鎌倉
道をさして落行けるに書房の諸生に弾二といふ者ありその日己の艶
まで艶之佑が房の戸鎖しておりしを怪しミ内の動静を看てあるにハ逃走
なる模様にて艶之佑路次にて共に出しなど火の家もみなりけれバさてハ其婦投奔
あるものと気がつきかくと首告しに至り白縁が書を写して即書房に

りける房へ至り戸を開て看るに什物一つも乱ずして只帳の
明白に登記してあり白縁畏ひて其故何とも知らざる所に忽壁間の
香炉に線香ささずして奇南の馨芬として鼻に觸を須臾を撞く只
見れバ壁上に八句の詩あり

擬向金龜洞裏遊　行綜端爲可人留
願隨紅拂同高踏　敢向朱家惜下流
好事已成誰索笑　屈身今去尚含羞
主人若問眞名姓　只在艶佑兩字間

白縁讀下して一遍し請の意をおもふに此の直の名ハ艶佑と
且彼の素故を知られど凍て「艶の行恋も已に
蜜に曲事なりとおもひぬに紛物一毫を執らず白の士の原より

夫婦なる事ハ誰を障るものぞんと思ひ何事の旨趣あるて手段を陳ひ
逃走しゝを夫婦が言いうにも測ひ世を希有の事なり孔さとんべある
べゝ法ゝ、那解書をもてゝ弾ニ小三郎成ハ伝ハ他い所く勢佐路に
あ人が急き捕へ来ハ吃急るものなれ命ハ強ニ思りて稽のそだ
ちくゝまて馳出ろ扱をも張三李ハ二人乃小吏ハ補名寺まゝ勢佐
路ハが今や来ると待居ハいまゝ勢佐夫婦来くゝ所ハ張三李ハ
向て急ぐ時すでゝ三年の左側るゝ人を来くゝ我ゝ歌れるれ
張三が云ハ我ゝ蒙忽ものなれ那神ハ城堙ハすと区成
称名寺の揚茶と達とゝ三すいさや那戸乃方を弱ハる区ハ
李ハ三ハ同三人若ハ称名寺を行出く那戸揚のハ到ハ
弾ニ小乃会ハ沢平ニ息後ハ路ハ捕海ニハよって捕人ハ

朱匣ハそ云ハ申ハれた張三李ハ左ひ強きとと我く事絵が陣人と
して勅ハ来ハ落梵なるさハ出ゝ渠を捉緊区ハそ三人脚を乗せて馳
区ハ郷の捕吏乃頭ハいうあゝ封境の衙門あって倩ハ媚牌場ある弾
ニ乃件の掘貌書を榜文ハ糊ハ眼を紙てハ云ハ某ハ小六命ハ盗
乃行ハ街の中ハ眼ハて夜ハ出ハ五て公ハ落来んとゝ待ハ云ハ究竟の
場所ハ区ハて三人の者倶ハ倩ハ圏酒店の奥ハて亮樹子の内ハ
ハ往来を伺ひ居ハ云ハ区ハて逃ハ伝路ハ夜ハいうなハ初て世の
衙門ハて見ハ出ハ計ハ三ハ故意ハ日中ハ出ハ来ハ
件ハ人ハ在て就ハ此ハ人ハ葉を区ハ逃ハ伝ハ伝路ハ
異ハ人乃後ハ榜文を写ハ寄ハ過ハ年中ハ模様を馬ハ見を提緊
云ハ者ハ五十貫の賞銭を表ハ人ハ文書ハ乃ハ区ハ筆ハ話ハ千頭ハ

後に人在て或人が背を拍ひて或人乃亡命人ぞも動くなゝれと喚る者あり或人忽ち一塊となりて身を回て後を看るに此人容貌魁偉皮膚甚肥肉にて東国一の力士と云べき者なり左右の猿臂を伸て或人が無手と扼留て猶此国酒店の内に引て入ぬ或人聊か絶て術に向て云るハ足下今此この榜文を看るに捕へる者ハ五十貫の賞銭を惠る帰来る者ハ其罪を宥し尚恩賞さるんとあり然る時ハ足下ハ或人原と深き罪あるにもあらざれバ何の縁故ありて身を遁れ隠るゝ免れ某ハ是男女川滝三郎なりと賞銭に眼を昏し奴原退かずバ其とてかざまゐて自ら中にふかく落なせよと出る人にて事ならバ総て往路にハ忙しく礼状述て暁に酒店を立出んとせし所に忽ち強二の晃槅子の門より踊て出路を掴みて孫悟なるが如くに喝すべきなりとぞ喝る男女川罵りて云う汝何ぞ妨ぐるとやすく路を開ひて立ち強二ハ立とを受ずして出て

遮りしかバ男女川も怒りて大ひに叱りつゝ一掴に強二が胸膊を攫んで高く差上けれバ強二ハ中に轉りて酒樽乃蓋をおしやりて真倒に下し半身ハ樽の中へ逆さまに陥れば泉のごとく外に溢れ出る酒店の主ハとて驚き惑ひて取て声を惜まずして躁乃小ものどもの附けたる張二が事に左右より一根乃棒を押へ執り擲るを男女川拳を握りて只一打に打ちしに左の手にて張二が頭を扯掴み右乃手にて小ものどもが頭を扯掴みて中に提げれバ二人ハ撃剣の如くのごとき勇士に掴まれし頭を何とぞして逃れんとすれども叶はず束ねたる肝は口に詰まりなまくずれたる男女川又力にまかせて二人が面と面を打付て掴み捨のごとく打合せれバおそひとしく張三が悲鳴ハ半途に正まで倒れ伏したる鳥猿遊出し倒れたる男女川袖を拂てさらにものいはずと哈々と打咲ふを勢ひ恰も金剛力士乃荒るゝが如くにやと思ふほどなる時に強二ハ酒樽の